

2025年度 早稲田大学 文学研究科  
博士後期課程 入試問題の訂正内容

〈博士後期課程入試〉

【一般外国語 日本語】

問題冊子：3ページ 7行目

設問番号：問七

(誤) 第①～②段落の中から

(正) 第⑤～⑥段落の中から

以上

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

①レトリックにおいて重要なのは、「日常の論理」である。日常の論理を支えるのは、論理学の演繹的推論に対応させた「蓋然的推論」と、帰納に対応させた「例証」である。「蓋然的推論」の前提となるのは、人々の「常識」あるいは「通念」とも呼ばれる社会一般に共通して認められている考えである。蓋然知とは常識のことを指し、人々の日常生活の行動の規範であり、判断の<sup>(1)</sup>拠り所でもある。また「蓋然的」とは、「必然的」の対義語であり、ある程度確実なこと、起こる可能性のあることを指す。疑わしいもの(偽)と必然的なもの(真)の中間にある。説得推論の真実らしさは、計測可能な蓋然性(確からしさの確率)とは異なる質的なものであり、「道理がある、もつともだ」の意味である。論理学的、科学的な確実さではなく、人間的な確実さ、社会的な確実さといえる。

②常識も通念も人々が当たり前のこととしているだけに漠然としており、時代や社会によっても異なるものだが、アリストテレスは、蓋然的推論を構成する原理を二十八種類に分類した。たとえば、香西秀信がアリストテレスから引用した分かりやすい例は、「相反するものに基づいて論じる」型式である。この型式では、ある状況から不利益を受けているのであれば、それと反対の状況からは利益を受けるだろうと推論する。どのような場合にでも必然的に真となるものではないが、私たちは日常こうした「蓋然的推論」を使って思考している。<sup>(2)</sup>常に確実に正しくはないが、「多くの場合において正しい思考法」である。

③「帰納」に対応する「例証」は、帰納のように個々の事実から一般的な原則を導き結論とするのではなく、具体的な事例からそれに類似した他の事例に移行して主張を根拠づける。たとえば、「現在取り上げている起こっているこのことがら、過去に起こったこの事例と類似している。過去の事例においてはこのような結末となった。よって現在起こっているこのことがらも同じ結末となるだろう」と推測し結論づける。香西が挙げた例が分かりやすい。「ペイストラトス<sup>(3)</sup>I、護衛兵を要求し、それを得ると独裁者になった。メガラのテアゲネスもそうであった。ここから、同様に護衛兵を要求しているディオニュシオスも独裁者になるうとする意図<sup>(4)</sup>IIあると判断される」。帰納であれば、過去の事例から「独裁を企む者は護衛兵を要求する」という一般原則を導出し、この「一般原則の導出」こそが帰納の目的だが、例証による論証は、具体的事例を根拠として他の具体的事例について結論づけ、目の前の状況の判断を人々に<sup>(5)</sup>セマる。つまりこの例であれば、デュオニュシオスの護衛兵の要求を<sup>(6)</sup>シリゾけ、その意図を今のうちに挫くようにと市民に警告し、その行動を<sup>(7)</sup>ウナガしているのである。

④論理学では、文と文の関係を形式的に取り出すことで、文脈や価値観に左右されずに推論の形式から結論の真偽を決定する。それに対して、レトリックが扱うのは価値判断である。価値判断とは「事の優劣、適否、理(道理)の有無に関する推論」である。レトリックとは、ある主張への人々の同意を求めてなされるあらゆる種類の議論そのものであるため、そこには、何を優先すべきか、どこに道理があるのか、目の前の状況に対して何をすることが適切なかの判断が示されている。その判断を主張として人々を説得するものである。<sup>(8)</sup>A、レトリックで扱う議論は、論争を避けられない議論であり、その結論は必然的性質を持つものではない。必然的性質を持つ論証には、用語を正確にして、あらゆる曖昧を排除して多様な解釈の可能性を一切取り除かなければならないが、日常で使用する言語でそれを行うのは至難の<sup>(9)</sup>業であり、ほとんど不可能である。レトリックは、そのような学問的に厳密な議論へ向かわず、<sup>(10)</sup>B他人を言葉で動かす技に力を注ぐ。

⑤C、議論の「長さ」と議論の各部分を述べる順番(「配置」)は、論理学では真偽の判断に関係しないため取り上げられないが、レトリックにおいては議論の「強さ」に大きく影響する。多くの場合、聴衆も読者も長い議論は好まない。分かりきった前提を述べるのは受け手を<sup>(11)</sup>アきさせるだけである。そのため日常では、すでに常識とされている「大前提」は述べて議論を進めるのが一般である。レトリックで、大前提を省いた「省略三段論法」が用いられるのはそのためである。

⑥その一方で、大前提が聴衆に受け入れられるかどうかは、まず確かめなければならない。聴衆に前提をはつきりと思わせ、前提の意味や適用の範囲を明らかにすることは、議論を有利に進めるために必要である。この前提が、レトリックの場合には蓋然的推論の型式から選択され、前提の「真実らしさ」をつくる。分析のために行われる抽象的演繹とは逆に、受け手に調子を合わせて展開されるレトリカル(修辞学的)な三段論法である。

⑦レトリックの例証でよく使われることわざは、ことわざ同士では矛盾するが、使う文脈によっていずれも正しくなる場合がある。たとえば、<sup>(12)</sup>「渡る世間に鬼はなし」と「人を見たら泥棒と思え」は、意味の上では矛盾し、いずれも常に正しいわけではないが、それらを使う場面や状況によって適切な根拠となりえることは、私たちが経験から知っていることである。つまり話し手/書き手の目的に沿って引用されればよい。<sup>(13)</sup>Dこのように文脈に真偽が依存することは論理学では許されないことである。論理学が言語の閉じたシステムの中で、システムを支える「規則」をもとに展開する制約があるのに対して、人間の行為は「必然的に帰結するものは一つとしてない」、いかようにもなるものだからである。

⑧レトリックは、長年の経験の蓄積から抽出した「論証の型」を学び、そこから時と場合に応じて選択することをすすめる。なぜなら、私たち人間は何もないところから自由に考えているわけではなく、使い慣れた型を用いて議論したり人を説得したりするからである。共有された型を用いるからこそ、他人を説得できるともいえる。ただ<sup>(14)</sup>闇雲にひたすら考えても、人間が一生の間に考え出せることは限られている。レトリック<sup>(15)</sup>III、さまざまな議論の観察から発想の型を抽出し類型化したものであり、

そこには長い歴史の蓄積 IV がある。アリストテレスが類型化を行った紀元前四世紀においてすら、説得弁論の技術はすでにそれなりの厚みと広がりをもって存在しており、先人の功績の上に立ってアリストテレスも体系化を行えたのである。

⑨ アリストテレスが論証の型を網羅的に分類したのだから、人はそこから取り出すだけでよい。ここには確立した方法に対する確固とした信頼感と、行き当たりばったりの自然発生的な無方法は何ももたらないという確信がある。レトリックの「発想」の基本的な考えは、論じる方法は個人が工夫して創造的に作り上げるといよりは、<sup>(8)</sup> 馴染みのパターンからすでに抽出され弁論論証の「型」を素材の上に <sup>(9)</sup> カブせるだけで卓越した弁論／論証ができるということである。

⑩ レトリックは、論理的思考を思考力という「力」としてではなく、「量」として捉える発想の転換を促すと香西は述べている。つまり思考力を養うには、まず私たちがよく使う議論の発想の型を大量に覚えることから始めることをすすめる。過去の経験を情報として蓄積することで、その場に最もふさわしい議論の型式を選び、それに当てはめて主張を「論拠つける」のである。

⑪ E 故事や寓話、伝承された物語、比喩を使った話などは、主張したいことからの具体的な結末を示す「根拠づけ」の宝庫であるためストックしておく例証する時に便利である。学んだ基本型が多ければ多いほど選択肢が増え、それらの組み合わせの可能性も広がる。議論論証に関するレトリックの知識は、思考の「引き出し」や選択すべきメニューとなる。基本型を使いこなして <sup>(10)</sup> 場数を踏めば、あらゆる場面において効果的な議論が行えるようになる。とりわけ相手とのやり取りによって議論する場合には、「好機を失うことなく」論拠を適切に配置することが可能になる。その場と聴衆に合わせて同じことがらをどのような長さでも、どのような順番でも、そして理性、感情、倫理のどれを軸としても議論することができる。ある現象は、原因としても結果としても叙述することができ、手段としても目的としても、全体の象徴としても目標への過程としても叙述することができる。つまり話し手／書き手の目的（主張）に応じてどのような枠組みも使える。その一方で、そうであるからこそ、そのうちのひとつを選ぶことは、それ以外の解釈を覆うことにもなる。レトリックの技術の蓄積から学べることは、何を選んで説得しているかのみならず、覆われているものは何かにも敏感になれることである。

⑫ レトリックにおける（論理的）な思考とは、「説得」という目的を達成するための戦略的な思考といえる。時と場合によって、つまり話し手／書き手の目的に応じてどのような手段があるのか、どのような操作を行ったらよいのかの <sup>(11)</sup> 実践的な効力を持つ論拠と論法の集大成が、レトリックだからである。ここで戦略的な思考を個人的な利益のために使えば「利己的な戦略」に終わる。しかし、政治的判断や道徳に関わる議論など、<sup>(12)</sup> 集団や社会の運命を決定する大切なことなら「慎重な判断」を大衆に理解させるための「利他的な戦略」としてレトリックを使うことも可能である。古代ギリシア・ローマの社会において高く評価されたのは後者であった。

（渡邊雅子『論理的思考とは何か』〈二〇二四〉による）

問一 傍線部(1)、(5)、(7)、(8)、(10)の漢字の読みを平仮名（現代かなづかい）で解答用紙の所定の欄に記せ。

問二 傍線部(2)、(3)、(4)、(6)、(9)の片仮名の部分を漢字に直し解答用紙の所定の欄に記せ。

問三 空欄A～Eそれぞれに入る最も適切な語句を、次のA～オの中から一つずつ選び、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。ただし同じ記号を二度以上用いてはならない。

- ア むしろ
- イ しかし
- ウ さらに
- エ したがって
- オ たとえば

問四 傍線部（あ）「常に確実に正しくはないが」のこの文脈での言い換えとして最も適切なものを、次のA～ウの中から一つ選び、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。

- ア どのような時にも必ず正しい場合があるが
- イ どのような時も必ず正しいとは限らないが
- ウ どのような時も絶対に正しくないが

問五 空欄I～IVそれぞれには、助詞「は」「が」のいずれかが入る。いずれか適切な助詞を解答用紙の所定の欄に記せ。

問六 傍線部(い)「「渡る世間に鬼はなし」と「人を見たら泥棒と思え」」のような二つのことわざの関係となるように、「二度あることは三度ある」の対として最も適切なことわざを、次のア～ウの中から一つ選び、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。

- ア 「仏の顔も三度まで」
- イ 「三度目の正直」
- ウ 「三度の飯より好き」

問七 傍線部(う)「実践的な効力」の言い換えとして最も適切な語句を、第①～②段落の中から七字で抜き出して解答用紙の所定の欄に記せ(記号なども一字に数える)。

問八 この文章はレトリックと論理学を対比的に論じているが、その捉え方について最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。

ア レトリックは感情に訴えかける説得を求め具体的かつ状況に応じた柔軟な議論に向かうのに対し、論理学は普遍的な基準を求め抽象的かつ厳密に体系化された議論に向かう。

イ レトリックは文脈に左右されない科学的な確実さを求め曖昧さを排除する議論に向かうのに対し、論理学は社会的な確実さを求め人々を説得する相互理解的な議論に向かう。

ウ レトリックは事柄の真偽を決定する道理を求め計測可能な蓋然性に議論が向かうのに対し、論理学は曖昧さを排除した厳密さを求め科学的な確実さに議論が向かう。

エ レトリックは眼の前の状況に対して適切な価値判断を求め時に避けられない議論に向かうのに対し、論理学は相互的理解を求め必然的な真実の探求に議論が向かう。

オ レトリックは価値判断に基づいて人間的な確実さを求め人々を説得する議論に向かうのに対し、論理学は推論の形式に基づいて科学的な確実さを求め学問的に厳密な議論に向かう。

問九 次のア～オの中から本文中に述べられていることと一致しないものを一つ選んで、その記号を解答用紙の所定の欄に記せ。

ア レトリックにおいて重要なのは「日常の論理」であり、「蓋然的推論」は常識や通念を前提にした、多くの場合に正しい日常の思考法である。

イ 「帰納」は個々の事実から普遍的な原則を取り出して結論とするが、「例証」は類似の事例を根拠として現状の判断を迫るものであり説得力をもたらす。

ウ レトリックは過去の情報を型として大量にストックしておくことで時と場合に応じて活用できるようになり、迅速に相手を論破する力をもたらす。

エ アリストテレスが分類した論証の型をはじめとするレトリックの蓄積は、説得の技術を体系化し、効率的な思考を可能にしている。

オ レトリックの技術は、説得のために選ばれる内容だけでなく、それによって覆い隠される他の可能性にも敏感になることを学ばせる。

問十 傍線部(え)「集団や社会の運命を決定する大切なこと」がらについての「慎重な判断」を大衆に理解させるための「利他的な戦略」としてレトリックを使うことも可能である」とあるが、ことわざや教訓話などのレトリックを使って相手を説得する事例を考えて解答用紙の所定の欄に記せ。なお解答は「…べきだ。」という形で終わるようにせよ。(七十字以内、記号や句読点も一字に数える)

